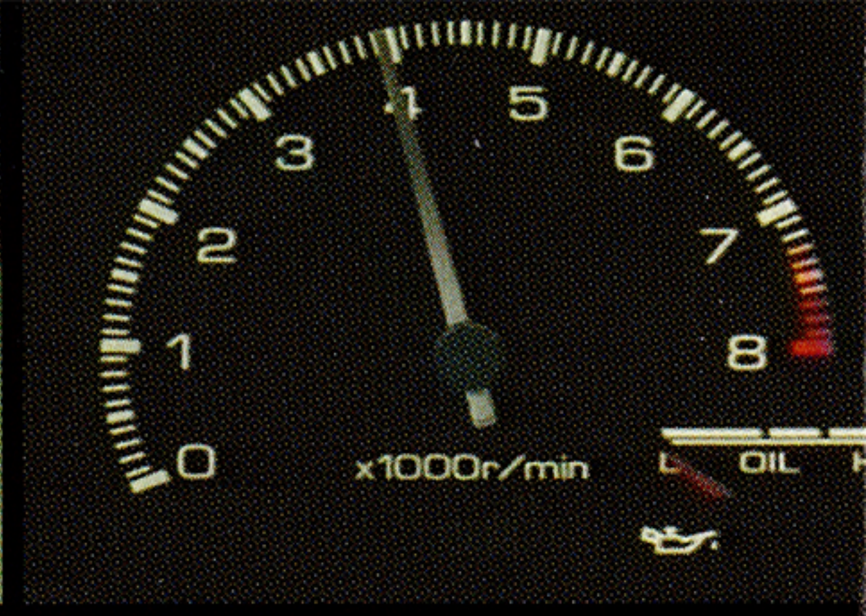
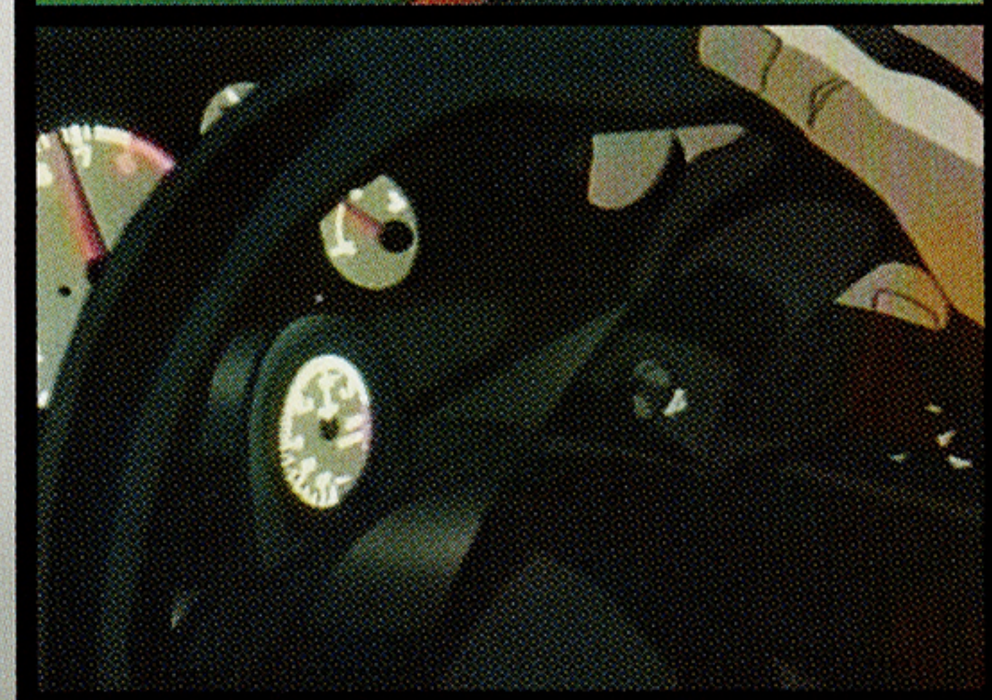
[イニシャル] 頭文字D First Stage

メモリアルマガジン

Dash編 VOL.3

講談社





CONTENTS

2 超スペシャルインタビュー　しげの秀一　ナビゲーター 三木眞一郎

6 『頭文字D』を彩る女たち　茂木なつき役 川澄綾子・佐藤真子役 根谷美智子・沙雪役 かかずゆみ

10 頭文字D CAR COLLECTION R32スカイラインGT-R

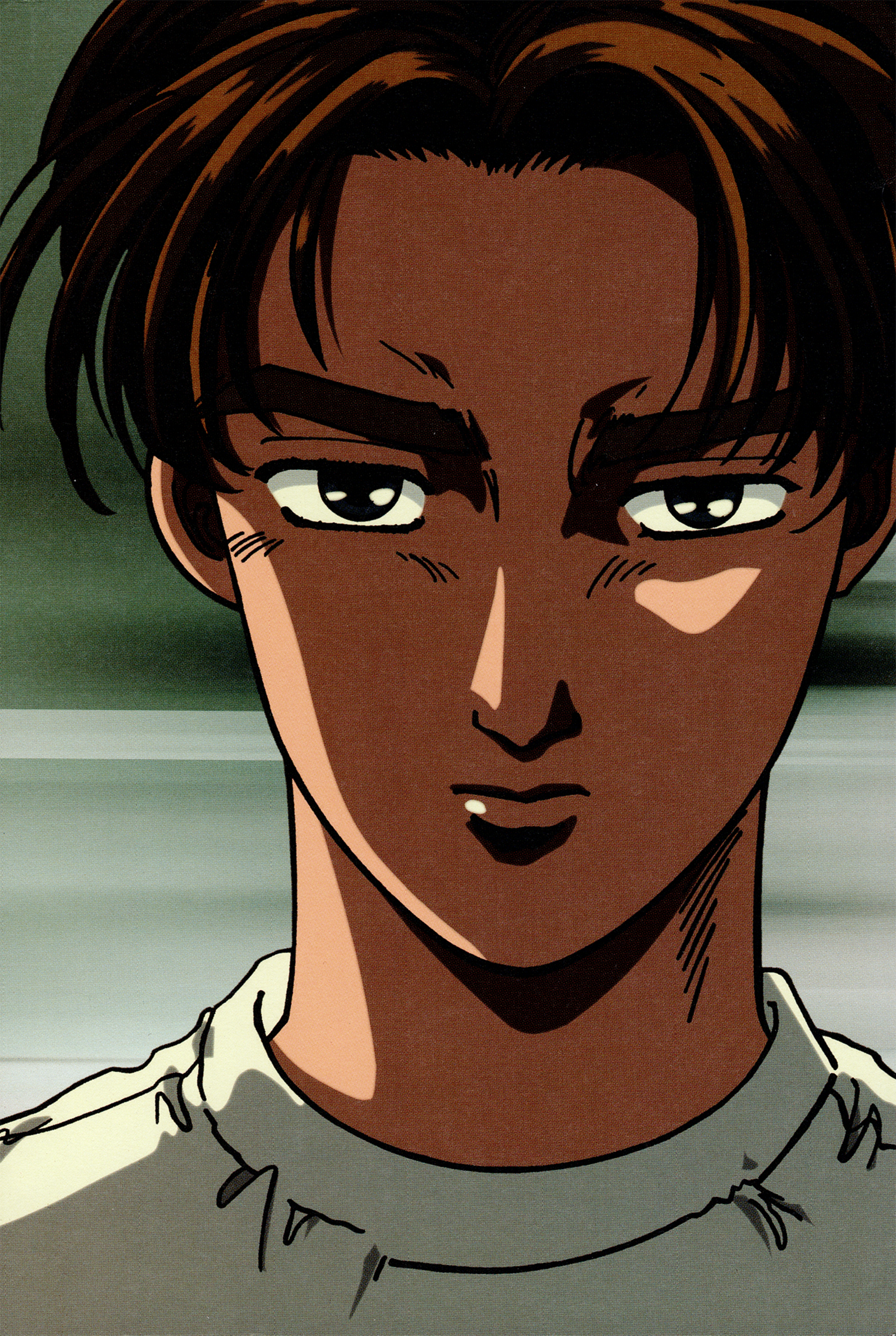
12 アニメ『頭文字D First Stage』が生まれた1998年5月−6月

16 『頭文字D』ストーリー解説(ACT.8〜ACT.10)

24 今だから話せる『頭文字D』を書くということ　脚本家 戸田博史・岸間信明

30 最新情報『頭文字D Fifth Stage』FD3S vs スープラ

頭文字D　メモリアルマガジン VOL.3　講談社



本誌とDVDで
W収録!!

超スペシャルインタビュー

しげの秀一

前編

本誌とDVDでたっぷり堪能！
しげの秀一の『頭文字D』創作
の秘密、クルマへの考え、
今ここに明かされる!!

ナビゲーター
三木眞一郎

三木眞一郎

『頭文字D』藤原拓海役。
声優として、多くの作品に参加。アニメ界を代表する声優のひとりである。
一方、バイク・カーマニアとしても知られ、拓海が乗るハチロクと同型のスプリンタートレノを所有する。

しげの秀一

『頭文字D』原作者。
1985年、『バリバリ伝説』（全38巻／1983年～1991年、週刊少年マガジンにて連載）にて講談社漫画賞少年部門を受賞。
1995年、『頭文字D』をヤングマガジンにて連載開始。

Special interview

『バリバリ伝説』から『頭文字D』

三木眞一郎　今日はしげの先生にお会い出来て、緊張しています。というのも、僕は高校生の頃に、『バリバリ伝説』を読んでいたんですよ。

しげの秀一　僕のデビュー作ですね。

三木　当時、バイクのレースのなかでも鈴鹿の4耐や8耐が流行っていましたよね。僕も『バリバリ伝説』に憧れて、菅生サーキットで開催されたアライレーシングスクールでノービスライセンスをとりまして、SDRというヤマハの2スト（2ストロークサイクル）の200ccのレースに出たこともあります。ですから今日、こうやってお会いできたのが本当に嬉しいです。

しげの　ありがとうございます。そう考えると、縁としては長いですよね。三木さんといえば、『頭文字D』のファンは、アニメ版からと思っていますよね。『バリバリ伝説』からと考えると、僕は三木さんという人に愛着がグッと深まっていく。今日は面白い話ができれば、と思っています。

三木　お願いします。今日は短い時間かもしれないですけど、いろいろお話できればと思っています。

クルマとともに、人が成長していく

――『頭文字D』ではランサーエボリューションなどは最強のライバル的な描かれ方をしています。そうしたクルマはどのように思われていますか？

三木　エボが進化していくと、メカが主導するようなクルマになっていく気がしますよね。

しげの　そうなんですよ。メカがドライバーのミスを受け止めるぜ、というクルマになっています。トラクションコントロールシステムとかね。ドライバーの仕事がちょっとずつ減っていく感じがする。

三木　そうですよね。

しげの　サーキットでタイムを出すためなら、それでもいいんです。でも、楽しく運転しようと思ったら、そこまで干渉してもらわないほうがいいんですよね。

三木　僕はそんなに運転がうまいほうではありませんが、「いけね!?」と思ったとき、その「いけね」をクルマが直してしまう。

しげの　そう！　うまくなれない気がする！

三木　そういう気がしますよね（笑）。

しげの　クルマ任せになってしまう。ブレーキングでもABS（アンチロック・ブレーキ・システム）が効いていたら、雨の日でもとりあえず「ビャーン」と踏んじゃうじゃないですか。それで、パパパンと効いてすませてしまう。ABSがないクルマは今時ないですけどね。でも、ハチロクはないんで（笑）。僕はロックをして「うわ、やべ！」というのを何度も体験して、独自にブレーキングを覚えた。ABSだと自分なりに覚えられない。ハチロクの何がいいって、最後はわざとロックさせるんですよ。そうすると、とても止まりきれないところからポーンと出ていく。そういうのをブレーキングのセッティングで調整する。パニックブレーキのときに危険なんですけどね（笑）。高速道路で目の前のクルマが急に止まったりすると、ケツがふらふらとなりながら止まるんで、何回か冷や汗をかきました（笑）。

三木　今の車は、ブレーキングについてもアシストがつ

いていますよね。たまに、ブレーキが効きすぎて怖いな、と思う瞬間があります。

しげの　めちゃ効きますよね。ギュッと効く。

三木　知り合いが僕のクルマに乗せてくれといって運転すると、ブレーキが効かなくて危ないな、といってくるんですよ（笑）。それは効かないんじゃなくて……。

しげの　そう、がっつり踏んであげなくてはいけない（笑）。

三木　クルマに合わせて人間が変えなければいけないのに、今はクルマのほうが人間に寄り添ってきている。

しげの　そうですねぇ。

三木　「あなたのために」というクルマになっているけど、じつはドライバーと一緒に育ってくれない、みたいな……。

しげの　……三木さん。クルマを語らすと熱いんだね（笑）。

三木　あはは、すみません（笑）。

しげの　嬉しいです（笑）。本当にそのとおりだと思いますよ。やさしすぎる。安全とか人命のためには必要ですが、スポーツカーを選ぶ人にはクルマの運転の基本を自分の力で身につけてほしい。いろんな電子デバイスが入ってきても、基本の技術があるのとないのとでは、違うと思うんですよ。クルマの運転を楽しむなら、ある程度、自分でコントロールできる余地があった上で、電子デバイスと付き合えばいいと思います。

三木　本当にそうですよね。最近はパワーバトルになっているじゃないですか。

しげの　スポーツカーはそうですね。

三木　自主規制をはずれて、２８０馬力以上のクルマがどんどん出てきている。そういえば僕の姉が無限フルキットのビートに乗っていたんです。

しげの　すごいお姉さんですね。

三木　ええ（笑）。たかだか軽でもオープンにしてみると音と気持ちよさが、パワーとは別の所にあるってわかる。

しげの　そうです。

三木　パワーがあるのを否定するわけじゃないんですけど、自分の技術にあったパワーを追求するのがいいんじゃないかな。

しげの　小排気量のクルマに乗るとわかりますよね。マニュアルに限るんですけど、低いギアで目一杯、回転をあげてから繋いであげる。そういうのがすごく気持ちいいんですよね。このクルマのエンジンを自分は使い切っているな、となる。それこそ３００馬力になったら、そんな加速の仕方をすることないんですよ（笑）。

三木　ははは（笑）。

しげの　ローで引っ張らなくても、セカンドあげて無造作に踏んでいけばえらくはやいし。もう、ロー、セカンド、サードと繋いでいこうと思ったら、法定速度では到底間に合わない速度になってしまう。日本の高速道路は３速くらいで間に合っちゃうんですよ。ＦＤに乗ったとき、ぜんぜん使いこなせていないと思ったんですよね。ポテンシャルを使い切れていないので、ハチロクのときのようにこいつは友達じゃないな、よそよそしい、他人だな、という感じです。

三木　すっごいわかります。

クルマを通じたコミュニケーション

クルマと彼をとりまく環境が、拓海自身を大人にするんです

しげの秀一

三木　拓海は自分が運転をすることで、まわりのイツキや池谷先輩が喜んでくれる。コミュニケーションになっているなと思うんです。

しげの　そうかも。もともと話をしないヤツですもんね。イツキとさえ大事な話を大してしていない感じです。クルマと彼をとりまく環境が、拓海自身を大人にしていく。それまでは、母親もいないし、変わり者の父親だし、かなりひねくれた生活なんですよ（笑）。

三木　はははは（笑）。

しげの　それが社交的になったり、社会的なつながりを教えたりするのが、ハチロクであったり、クルマを取り巻く仲間だと思う。三木さんの仰るとおりだと思いますよ。

三木　拓海はクルマを通じてコミュニケーションを覚えますよね。乱暴な運転をする人が嫌いじゃないですか。彼は彼なりのモラルの中で、クルマを愛していくようになった。僕としては「クルマはいいものだぞ」と拓海が思えるようになったのが嬉しいですね。最近の単行本だと、涼介の過去の因縁話がありますよね。1台のクルマのブレーキがイッてしまうのを、2台で止めるじゃないですか（42巻 Vol.603「かおり」）。

しげの　最近のエピソードですね。

三木　オレ、あれがすごいなと思って。

しげの　三木さん、あの話はお好きですか？

三木　あそこを読むと、めっちゃ熱くなるんですよ。

しげの　それは嬉しいな。

三木　男同士の言わずもがな、のやり取りじゃないですか。

しげの　会話があるわけではないですもんね。目と目と状況だけで「よっしゃ行くぞ」とガーンと行く。

三木　「あんたひとりに…そこまでやらせるわけにはいかねえな!!」というセリフがあるじゃないですか。そういう感じのガッツが、クルマを通じてあるっていうのがいい。これが野球マンガだったら、難しい状況でゲッツーを取るぞ、というのはありますけど、クルマのドラマでそういうのを描かれるのはすごいなと思いました。

しげの　確かに今までのクルマのマンガではなかったかもしれません。クルマはプライベートなものですよね。助手席に誰かいない限りは、運転席に座ると完全にひとりだけの世界。走りながら誰かと熱いコミュニケーションはない。まして3台の関係性となるとね。あのシーンはわりと素直に出てきたシーンなんですよ。涼介と死神のバトル、ゼロの池田が出てきます。池田は1回戦った相手で、後ろから傍観者のように見ていて飛び込んでくる。

三木　そうです。

しげの　……あそこは、僕、好きですね（笑）。

三木　すごく、いいですよ！　死神がふらふらしている状況を見て、ふたりが判断するんですよね。

しげの　そう。後ろにいる2台はオーソリティですからブレーキの状態が悪いことはイヤというほどわかるわけですよ。死神は危険なヤツです。汚いことをいくつもやってね。しかし、何があっても助けなければいけないという、理屈じゃないことやろうとする。とにかく命を助ける。熱い感じですよね。

三木　そうなんです！　男なら阿吽の呼吸を感じる熱さがあそこにあるんです。

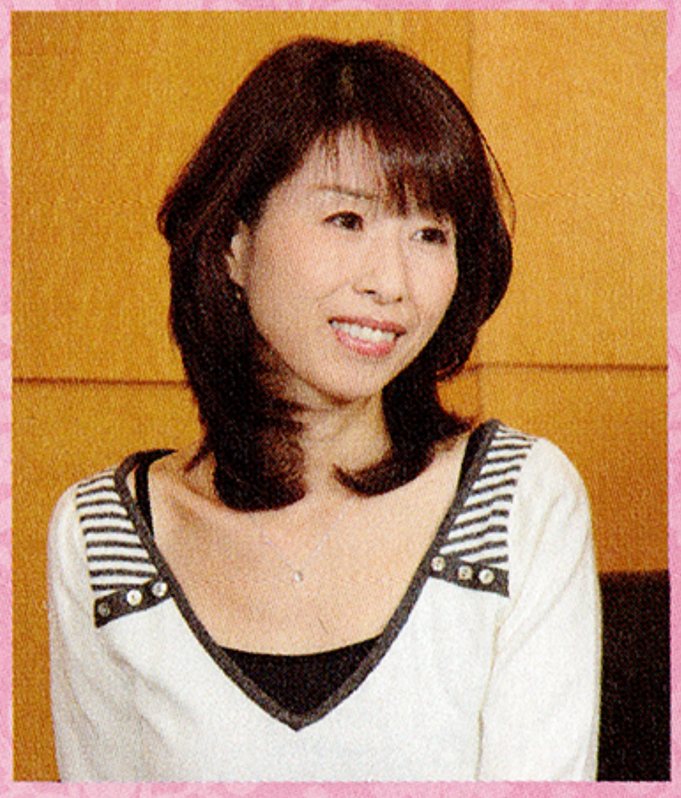
しげの　そういってもらえると、嬉しいですね（笑）。

VOL.4へ続く！

DVDも買って Don't miss it!!

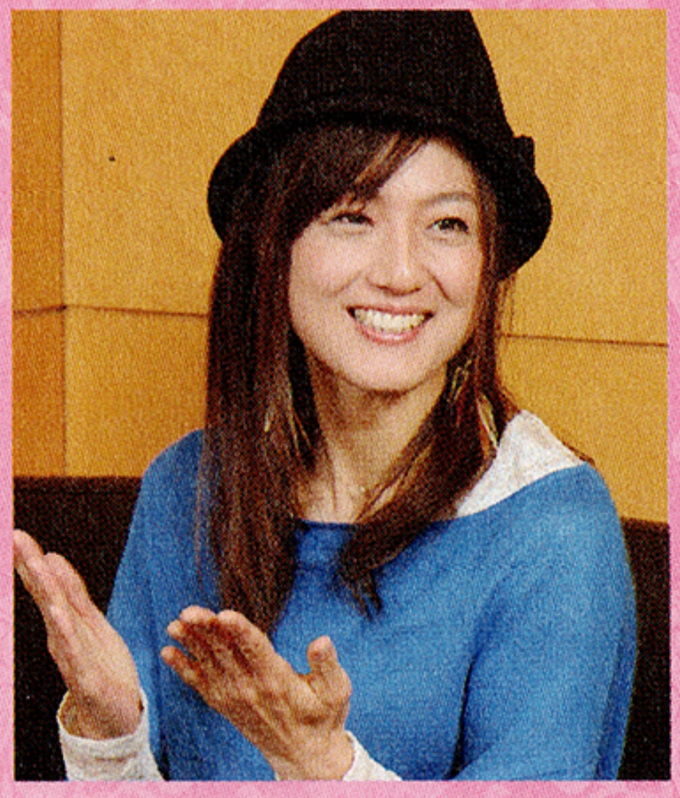
『頭文字D』を彩る女たち（ヒロイン）

『頭文字D』のFirst Stageを華やかに飾ったヒロインを演じた声優さんたちが集結。ヒロインたちのガールズトークが花開く。彼女たちへの質問はトランプを引いて決めるくじ引き方式。さて、最初のカードは……？



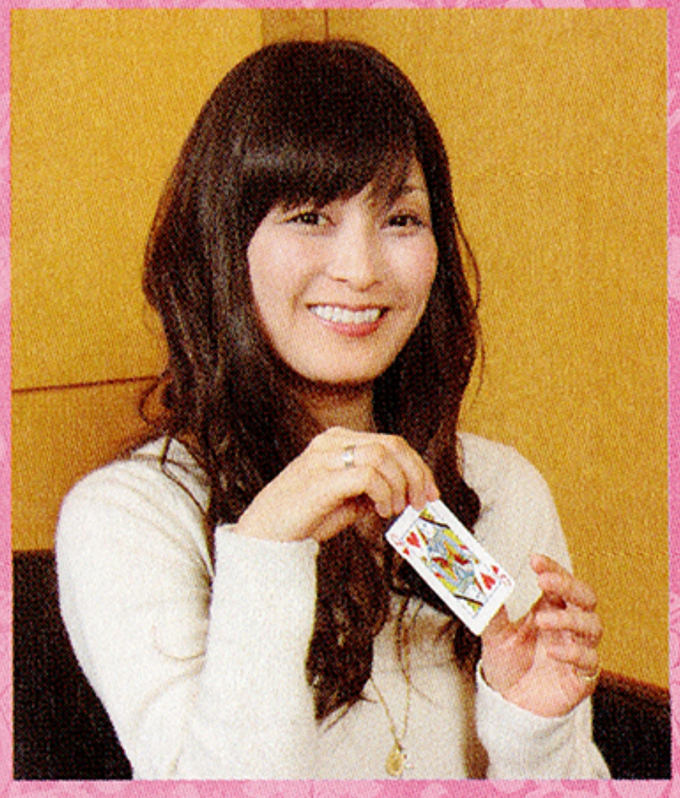
根谷美智子

佐藤真子役。『鋼の錬金術師』『交響詩篇エウレカセブン』など様々な作品で活躍。



かかずゆみ

沙雪役。『ドラえもん』の源静香役をはじめ『AKB0048』など、幅広い作品で活動をしている。



川澄綾子

茂木なつき役。『ジョジョの奇妙な冒険』『Fate/Zero』など多くの作品のヒロインを演じる。

Q 好きなクルマはなんですか？

川澄　私、収録当時は免許を持っていなかったんです。『頭文字D』の現場は、キャストの男性陣がクルマ好きで、音響監督の三間（雅文）さんもクルマが大好きで。それで「はやく免許をとってクルマを買いなよ」とすごく薦められました。かなり走り屋っぽいクルマを薦められて（笑）、困った記憶があります。三木（眞一郎・藤原拓海役）さんが当時からハチロクに乗っていたので、『頭文字D』の収録のあとに一度乗せていただいたことがあります。「リアル拓海とリアルなつきだね」なんて話をしました。

根谷　私も三木さんのハチロクに乗ったことがあります。私は当時も今もクルマのことがまったくわからないんですけど、かっこよかったです。

川澄　古い車ですけど、『頭文字D』のおかげで今でも大人気ですよね。

根谷　自分たちが乗っていたシルエイティだけは、すぐに見分けがつきます！

かかず　私も印象深いクルマはシルエイティです。インパクトブルー。あと、当時のマネージャーがハチロクに乗っていたことがあって。すごく『頭文字D』好きだったんです。シートベルトは4点式でした！

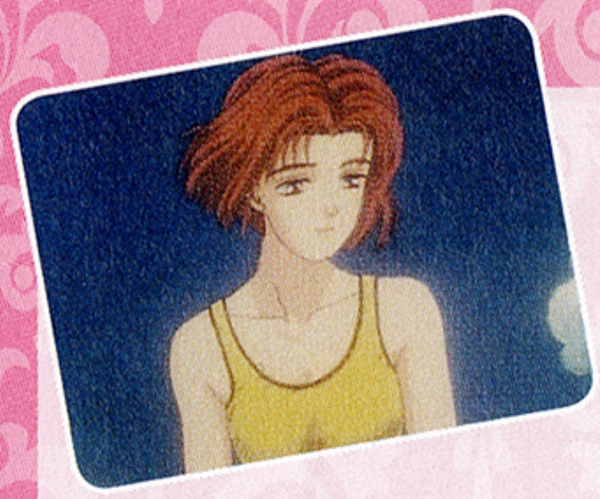
一同　ああ～、それは本物だね（笑）。

川澄　当時は『頭文字D』に出てきたクルマを街で見かけると「アッ」と気づくようになりましたね。

かかず　いますよね。パンダトレノとか。

川澄　『頭文字D』が好きなのかな？　と思っちゃう。私、榛名山に行ったことがあるんですけど、『頭文字D』に出てきそうな人がいっぱいいましたよ。

Q 『頭文字D』で印象に残っているシーンはどこですか？



川澄　拓海となつきが海へデートに行くシーンですね。なつきちゃんは小悪魔なんですよね。純朴な拓海くんがドギマギするというシーンで「新しい水着買っちゃった」とかいうんです。私自身がこの作品はデビューして2作品目のアニメだったので、本当に一生懸命だったんですけど、いま思うと……悪い女の子だなあ！って（笑）。なつきは援助交際をしているパパがいるんだけど、それを悪いと思っていない天然なところが、なつきの魅力……なのかな。

根谷　真子は走りは天才的なんだけど、それ以外についてはポワーンとしてるキャラクターですよね。収録中は何度も「あたしたちは2人でひとつだからね」といっていたセリフが印象に残っています。

かかず　真子ちゃんは内気なんですけど、根谷さんはすごくしっかりしているんです。だから、私は劇中では真子を引っ張っているけど、収録中は根谷さんについていくという関係でした。

根谷　なにいってんの！（笑）

かかず　私もデビューして間もないころに出演した作品で、独特な世界を描いたものだったので、自分にそれほど余裕はありませんでした（笑）。

川澄　セリフが難しいんですよね。

かかず　そう、わからない言葉も多かったし。アニメで収録するシーンは、原作のここのシーンだ……って照らし合わせながら準備していました。

根谷　私は沙雪に指示を受ける役だったから、クルマ関係のセリフは少なくて、困ったら「なんとかして！」って沙雪に頼っていました（笑）。沙雪は説明しなきゃいけないので大変だったよね。

かかず　音響監督さんやスタッフさん、キャストのみなさんに用語を教えてもらっていましたね。沙雪が「対向車来てるよ、真子。でも、3つコーナーの先だからここは気にせず全開！」って細かく指示するんです。そうすると真子が……。

根谷　「オッケー沙雪！」って（笑）。

かかず　本当に「2人でひとつ」でしたね。

Q『頭文字D』に関わって思い出深いエピソードを教えてください！

川澄　私にとってはほぼ初のTVシリーズのアニメ作品で、お2人がいらっしゃるまで、収録現場はほとんど女性は私ひとりだったんです。クルマのことはわからないし、キャストのみなさんも大先輩ばかりで、本当にちっちゃくなっていたんです。そうしたら、矢尾一樹さん（池谷浩一郎役）や岩田光央さん（武内樹役）や関智一さん（高橋啓介役）ができない私を気遣ってくださって。優しいお兄さんたちに支えてもらっていた現場だったと思います。とってもいい経験でしたね。鍛えられた……といいますか（笑）。映像の中では高校生や大学生なんですが、収録現場で振り向くとみんなすごくアダルトで（笑）。そのあと、ほかの作品に参加してみて、すごく独特な世界だったんだなと思いましたね。

根谷　さっきも綾ちゃん（川澄綾子）が言っていたとおり、現場にいる人が全員クルマ好きなんです。収録の合間はクルマの用語の説明をしていただいて、休憩の時間は自分のクルマの話をしていて……。それがとにかく『頭文字D』の思い出深いところでした。

かかず　収録スタジオから飛び出した話なのですが…。当時、家族でよく食べに行っていた、埼玉の秩父の方にある〝峠のうどん屋さん〟があったんです。そこの若旦那が「『頭文字D』に出てるんですか！」と話しかけてくれたのがすごく嬉しかったです。

根谷　きっと走る人だったんでしょうね。

かかず　そうなんですかね。でもクルマは好きな方だったみたいです。「アニメはよくわかんないんですけど、『頭文字D』は見ています！　知り合いが関わっているのは、すごく嬉しい」といってくれたのを今でもよく憶えています。

Q藤原拓海という主人公にどんな印象がありますか？

川澄　高校生で「彼女欲しい」とか「お金欲しい」とか子どもっぽい人が多い中で、拓海はぼーっとしていながら、どこかでほかの人と違うところがあるんですよね。その違うところは、「走ることが好きなんだ」「速く走りたいんだ」という、拓海くん自身もその後に気づいていく感情に根差しているんだと思うんですけど。そういうところが、なつきは気になっていたんでしょうね。

根谷　私の役柄は、拓海くんと直接しゃべることはほとんどなくて。レースしているときにお互いにモノローグでしゃべっているだけなんですよ。でも、私たちがレースに負けても、真子は気分がよさそうにしていましたからね。拓海の才能に負けた、気持ちよさがあったんでしょう。拓海には才能を持っている人という印象があります。

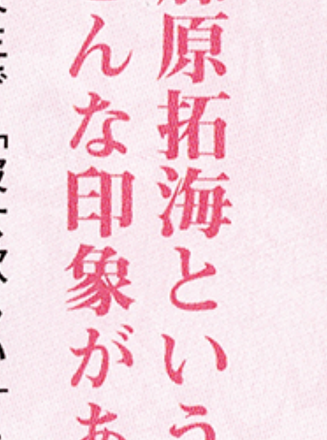
かかず　私にとって拓海は、三木さんそのものですね。私が三木さんのプライベートを全く知らないから、そう思っているのかもしれませんが。口数は少ないけど、言いたいことはしっかりいう。芯がちゃんと通っている。そういうところが三木さんと拓海が似ているところだと思います。

川澄　たしかに、みんなちょっと役柄と似てません？

根谷　イツキと岩田さんとか（笑）？　なんでかな、似てきちゃうのかもしれない。

川澄　高木渉さんがやっていた健二も。

かかず　子安武人さんの高橋涼介も、クールなところは似てますよね。関智一さんが突っ走るところを、子安さんが抑える、みたいな関係もそういうところがあったかも（笑）。



Q『頭文字D』で気になる男性は？

川澄　私は最初からずーっと啓介さんです！　拓海くんもすてきなんですけど、啓介さんのやんちゃっぽい感じが好きで。才能を秘めているけれど、まだ未完成なところも魅力です。将来性を買いました。

根谷　私は拓海のお父さん・文太さんがカッコいいなって思っていました。

一同　そうだよねえ！

根谷　一度、涼介が気になった時もあったんですけど、涼介は白い靴を履いているんですよねー。

川澄　そこですか！

根谷　エナメルっぽい白い靴を履いていて。そのセンスはどうかなって思って、あきらめました（笑）。

川澄　カッコいいのに～。

かかず　クルマの色にあわせてるんじゃないですか？

根谷　子安さんに、涼介の白い靴について聞いたんですよ。そうしたら「そうなんだよなあ」って。

一同　子安さんも困ってる。

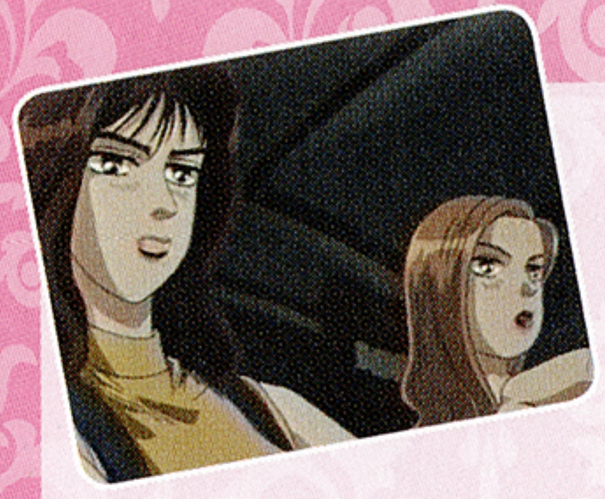
川澄　残念ですねえ！

根谷　全体を見たときには、旦那にするならきっと池谷がいいんだろうなと。真子ちゃんが見ていないところも含めて、私は彼を見ているわけですが、彼は頼りないところもあるけど優しいし、一生懸命なところがあるんですよ。幸せな生活をおくれるんじゃないかなと。

かかず　私も文太さんです。

根谷　やっぱり！

かかず　シブいですよね。あとはガソリンスタンドの店長さん（立花祐一）。2人とも年齢がだいぶ上だ（笑）。昔は走り屋だったのかもしれないけど、いまは拓海たちを見守っていて。そういうところがすごく魅力的です。



ラストクエスチョン Q アニメ『頭文字D』もいよいよ16年目。みなさんにとって『頭文字D』とはどんな作品ですか？

川澄　実際にやっていたときは、とにかく無我夢中でしたし、みなさんについていくことで精いっぱいだったんですが、あのころから16年後の今まで続いているということがすごいなと、とても大きな作品だったんだなとあらためて思います。『頭文字D』の放送が終わってからも、茂木なつき役をやっていたことで私を知ってくださった方もいますし、私にとっても大事な作品になりました。

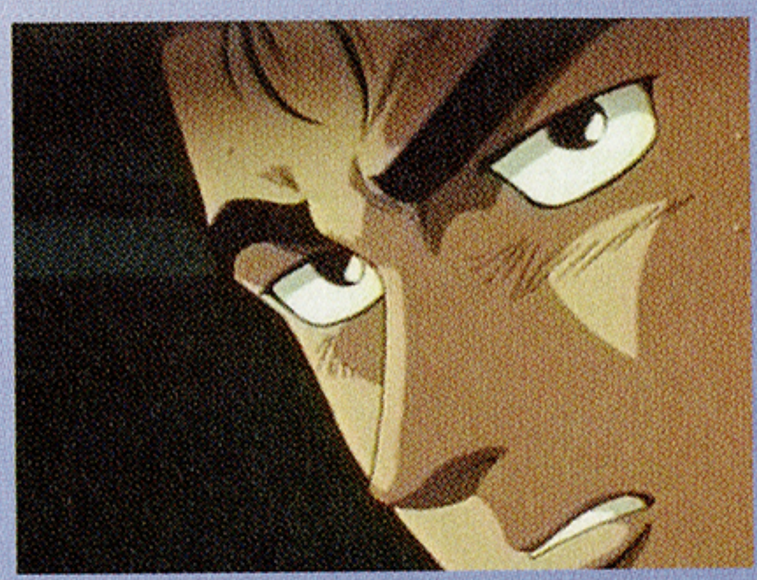
根谷　真子という役柄もそうなんですが、作品自体がすごく好きなんです。自分が出ている、出ていないにかかわらず、ファーストステージは全話見ていました。先ほども話したように、キャストやスタッフのみんなが打ち込んで作っていて。音響面も本物のエンジン音を使ったり、あちこちにこだわっていたんですよね。レースのときに無音になるシーンがあって、アニメでこんなに無音のシーンを演出として使う作品があるんだと新しさに驚いたことがあるんです。今見てもすごく斬新な作品だったな、と思います。いまだに真子をやれる機会があるので、本当に良い作品と出会えたなと思います。

かかず　この作品に関わるまで、峠を攻めてる人たちってちょっと怖い印象があったんです。でも、この作品に関わってから、みんなクルマへの愛を持っていて、好きなことに打ち込んでいるんだなぁと知ることが出来ました。実際、沙雪のように直接コミュニケーションを取ることはないと思いますが、作品を通じて、彼らを見る目が少し変わってきました。でも、対向車がたまたま峠に迷い込んだ運転初心者って事もありうるので…安全第一でお願いしますね！

SKYLINE GT-R V-spec Ⅱ BNR32

1989年～1994年に生産された8代目のスカイライン。コンパクトなボディに大きなツインターボエンジンを搭載する人気のマシン。普段は2WD（二輪駆動）のFR。パワーをかけると4WD（四輪駆動）に切り替わる電子制御（アテーサE・TS）を搭載。ノーマルでも280psを誇るRB26DETTエンジンを搭載している。

中里はR32本来のエンジンパワーをセーブし、ストレートではアクセルを踏まず、コーナリングで拓海のハチロクに勝負を挑んだ。グリップ走行でコーナーを攻めるも、拓海のドライビングセンスに中里自身が動揺。スピンするという失態を犯してしまった。マシンのスペックを活かすことができれば、また違う結果を出せたかもしれない。



エンジン：RB26DETT
排 気 量：約 2600cc
チューニング：不明

Night Kids

1998年 生まれた

5月

大関若乃花が横綱に昇進、貴乃花と並び史上初の兄弟横綱に！

2日　XJAPANのギタリストであったhideが自宅で死去

2日　映画『スターシップ・トゥルーパーズ』（原作：ロバート・A・ハインライン、監督：ポール・ヴァーホーヴェン）公開

7日　ダイムラー・ベンツとクライスラーが合併し「ダイムラー・クライスラー」になると発表

10日　マンガ家のねこぢるが自殺

12日　サッカーくじ法（スポーツ振興投票の実施等に関する法律）が成立

13日　hide with Spread Beaverのシングル『ピンクスパイダー』発売

13日　the brilliant greenのシングル『There will be love there ー愛のある場所ー』発売

14日　トヨタ「プログレ」発売

hide

1964年生まれ、神奈川県出身。XJAPANのギタリスト"HIDE"として活躍し、同バンド解散後の1998年からソロ活動を本格化。その矢先となる5月2日に自宅で死亡しているのが発見された。事故死とも自殺とも言われている。同月に生前から予定されていたシングル『ピンクスパイダー』『ever free』が発売されたこともあり、ファン以外にも大きな衝撃と喪失感を与えた。

アニメ［イニシャル］頭文字D が First Stage

19日 一部地域（先行地区）でナンバープレートの希望番号制を実施、分類番号は3桁に

20日 B'zのベストアルバム『B'z The Best "Pleasure"』発売、500万枚以上のヒットに

21日 タレントの雛形あきこがCMディレクターと入籍

25日 歌手の松田聖子が歯科医師との再婚を発表、「ビビビ婚」流行語に

日産「スカイライン（10代目）」発売

27日 大関若乃花が横綱に昇進、貴乃花と並び史上初の兄弟横綱に

hide with Spread Beaver のシングル『ever free』発売

椎名林檎がシングル『幸福論』でデビュー

28日 パキスタンがインドに対抗して初の核実験実施

29日 トヨタ「ガイア」発売

5月 may

1998年 生まれた

6月

10日 9日 7日 6日 5日 3日 1日

女優の鈴木杏樹が外科医と入籍

ゆずがシングル『夏色』でメジャーデビュー

ビートたけしの娘、北野井子がシングル『Begin』でデビュー

フォルクスワーゲンがロールスロイスを買収

歌手の玉置浩二と女優の薬師丸ひろ子が離婚

糸井重里主宰によるサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」開始

ル・マン24時間耐久レースで日産「R390GT1」（鈴木亜久里、星野一義、影山正彦）が3位入賞、日本人ドライバーだけのチームでは初の表彰台

マツダ「ファミリア（9代目）」発売

メルセデス・ベンツ「Vクラス」発売

FIFAワールドカップ・フランス大会が開幕

ル・マン24時間耐久レースで日産「R390GT1」が3位入賞！

FIFAワールドカップ・フランス大会

1998年6月10日から7月12日にフランスで開催されたサッカーの世界選手権大会。日本にとってはワールドカップ初出場となり、日本代表戦のテレビ中継の視聴率は軒並み50％以上を記録した。当時の中心選手は中山雅史、呂比須ワグナー、中田英寿、名波浩、井原正巳、川口能活ら。グループリーグで日本はアルゼンチン、クロアチア、ジャマイカと戦い、0勝3敗で敗退。決勝ではフランスがブラジルを下して初優勝、開催国の意地を見せつけた。

アニメ［イニシャルD］が First Stage

12日 アウディがランボルギーニを買収

13日 映画『ムトゥ 踊るマハラジャ』（監督：K・S・ラヴィクマール）公開

13日 いすゞ「ウィザード（2代目）」「ミュー（2代目）」発売

14日 女優の大塚寧々が詩人の三代目魚武濱田成夫と入籍

14日 ワールドカップで日本代表がアルゼンチンと対戦

14日 NBAバスケットボールでシカゴ・ブルズが優勝、マイケル・ジョーダンの最終試合に。その後、2001年に復帰。2003年4月16日に選手生活に幕を閉じた

15日 三菱「パジェロ イオ」発売

18日 ゲーム『XI［sai］』発売

20日 映画『ディープ・インパクト』（監督：ミミ・レダー）公開

20日 ワールドカップで日本代表がクロアチアと対戦

23日 日産「プレサージュ」発売

24日 T.M.Revolution のシングル『HOT LIMIT』発売

26日 ワールドカップで日本代表がジャマイカと対戦。0勝3敗でグループリーグ敗退

27日 映画『不夜城 SLEEPLESS TOWN』（原作：馳星周、監督：リー・チーガイ）公開

6月 June

頭文字
[イニシャル]
D
ストーリー
解説

MAIN STAFF

原　　作　しげの秀一（講談社　ヤングマガジン連載）
企　　画　庄司隆三（プライム・ディレクション）
エグゼクティブプロデューサー　宇佐美　廉（オービー企画）
プロデューサー　福田佳与（パステル）
　　茂垣弘道（スタジオコメット）
アシスタント・プロデューサー　菊地禎仁（スタジオコメット）
　　杉村重郎（スタジオぎゃろっぷ）
　　市川邦泰（プライム・ディレクション）
キャラクターデザイン・総作画監督　古瀬　登
CG監督　長尾聡浩（ネスト）
美術監督　高橋和博
音　　楽　勝又隆一
音響監督　三間雅文
制　　作　パステル
監　　修　土屋圭市　ホットバージョン編集部
主 題 歌　「around the world」m.o.v.e (avex tune)
オープニング　小深田真次
編　　成　金田耕司（フジテレビ）
監　　督　三沢　伸
製　　作　プライム・ディレクション／オービー企画

TITLE

ACT.8 タイムアップ寸前!

Cast 拓　海　三木眞一郎／文　太　石塚運昇／イツキ　岩田光央／なつき　川澄綾子／祐　一　西村知道／池　谷　矢尾一樹
健　二　高木　渉／涼　介　子安武人／啓　介　関　智一／中　里　檜山修之／細井　治／鈴木　淳／田中伸幸

Staff 脚本　戸田博史／絵コンテ　三沢 伸・工藤 進／演出　山口美浩／音響制作　テクノサウンド／作画監督　山崎　猛
レイアウト監修　林　千博／色彩設計・色指定　安斎直美／撮影監督　森下成一／編集　岡安プロモーション
エンディングテーマ「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)

STORY

バトルの時間が迫る。妙義ナイトキッズの中里はR32を駆り堂々登場。拓海に敗れた高橋兄弟も姿を見せる。興奮する秋名のギャラリー。そのころ家で父の帰りを待つ拓海は「走りたい」という想いをはじめて感じていたが、肝心のクルマがなかった。イツキが観念し、中里に詫びを入れようとしたとき、ハチロクが現れた!

PUNCH LINE
名シーンピックアップ

「ドリフトなんてギャラリーを沸かせるだけのパフォーマンスだ」と言い切る中里。彼のマシンはR32。タイヤを滑らさずにコーナリングする「グリップ走行」を得意としている。ドリフト対グリップ、どちらが速いか。走り屋にとって永遠の争点がいま問われる。

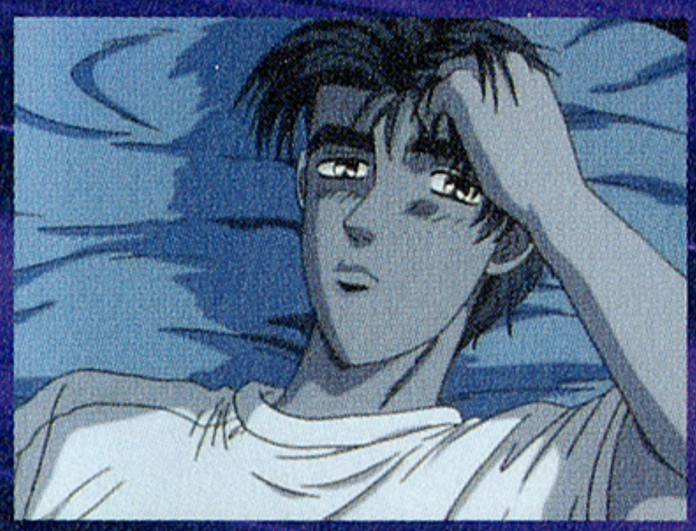
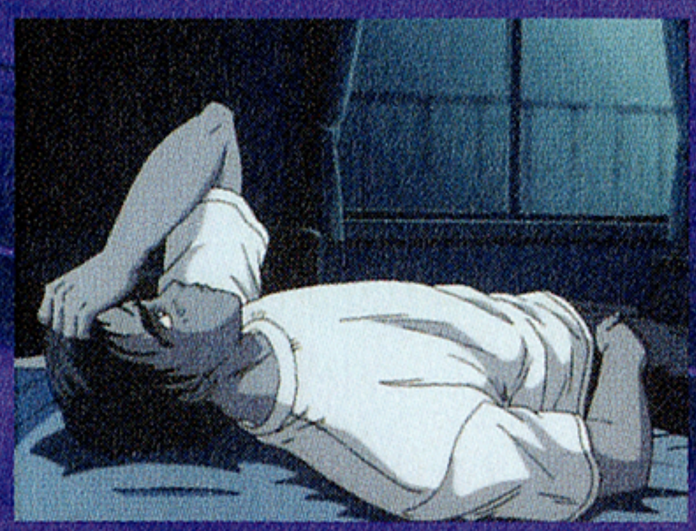
CHECK POINT

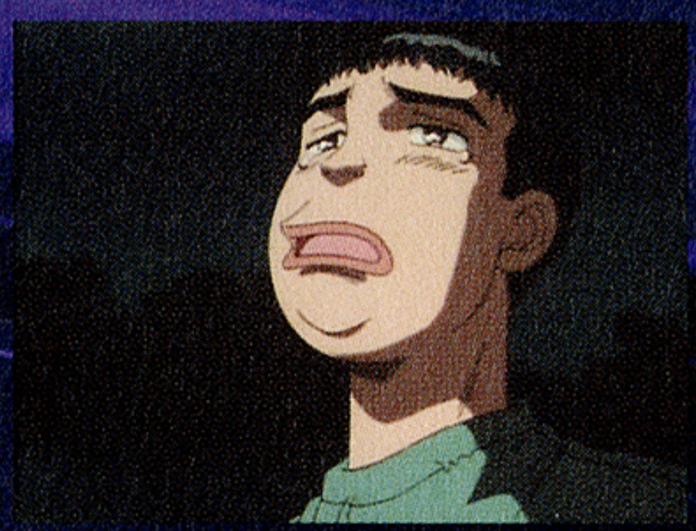
妙義ナイトキッズの中里はかつてS13に乗っていた。しかし、R32乗りの島村栄吉に敗れたことをきっかけに、R32に宗旨替え。以来、グリップ走行を志向するようになる。この物語はドラマCD「黒い稲妻・新たなる不敗伝説」にて語られた。以来、中里は負け知らず。その本領が発揮される。

WORDS

「俺がいまできるすべてをぶつけてみたい。
こんな気分になったのははじめてだ」

（拓海）



NEXT EPISODE

予告編

「中里君、ハチロクとのバトル、勝算は？」「ビシッ、そんなこと決まっているだろうが」「R32の勝ちってわけだね。でも高橋涼……」「ヤツは弟が負けてビビってるのさ。群馬最速はこの中里毅だってことをわからせてやる、ビシュー。グリップで走るほうがとことん速いってことも。得も言われぬ余韻ってものも見せてやらあ」「えっと、そのビシュってのは？」「アクションだよ、アクション」「次回、『頭文字D』、限界バトル！」「ビシッ!!」「Don't miss it!!!」

BGM

音楽

MY ONLY STAR

SUSAN BELL

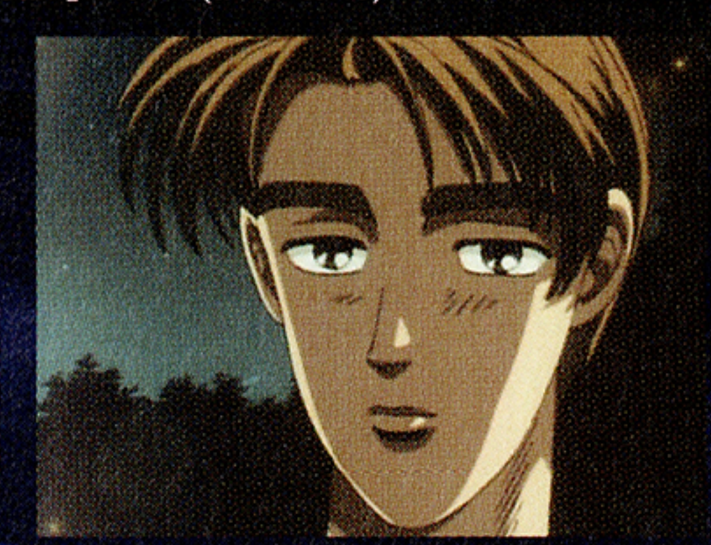
父からハチロクを取り戻した拓海は「走りたい」という気持ちを走りにぶつける。ライバルたちが待つ秋名の峠を目指して全開走行。同行していた池谷をおいて走り去る。女性ボーカルの軽やかな歌声が、解き放たれた拓海の想いを代弁する。スピード感あふれる一曲。

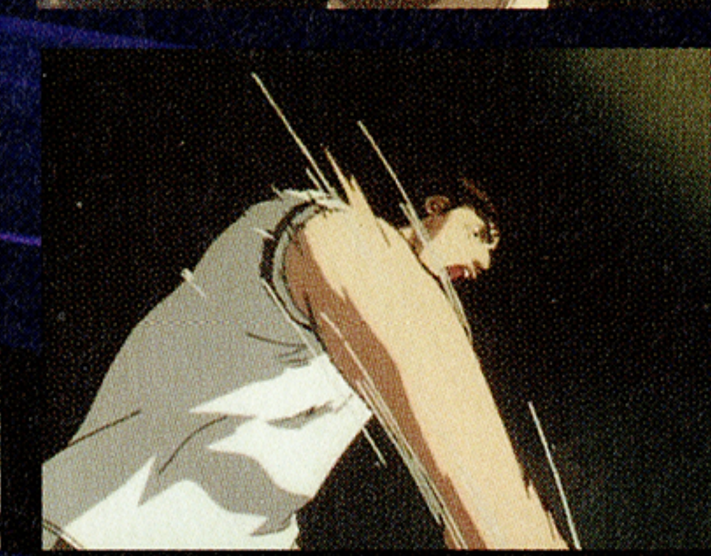
TITLE

ACT.9 限界バトル!

Cast 拓　海　三木眞一郎／文　太　石塚運昇／イツキ　岩田光央／なつき　川澄綾子／祐　一　西村知道／池　谷　矢尾一樹
涼　介　子安武人／啓　介　関　智一／中　里　檜山修之／健　二　高木　渉／細井　治／田中伸幸

Staff 脚本　岸間信明／絵コンテ・演出　波多正美／音響制作　テクノサウンド／作画監督　石井邦幸／レイアウト監修　林　千博
色彩設計　安斎直美／色指定　藤田弘美／撮影監督　赤沢賢二／編集　岡安プロモーション
エンディングテーマ「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)





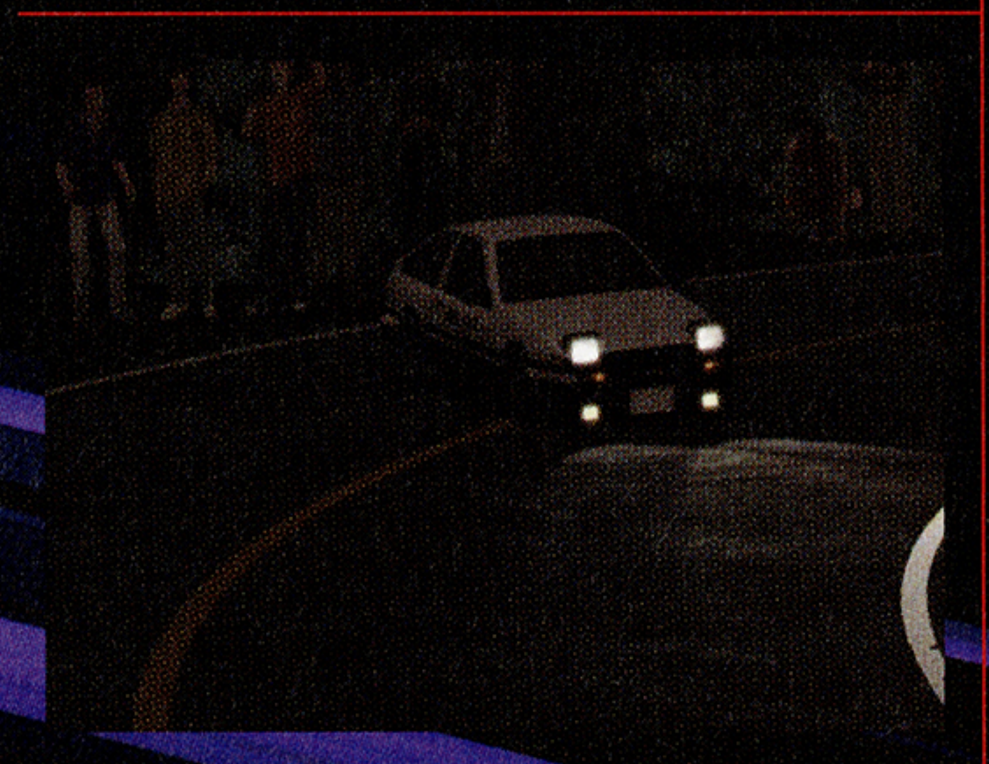
STORY

群馬県最速を競うバトルがはじまった。中里が飛び出て、拓海が追うかたちに。そして涼介も追いかけて、試合を観戦する。ストレートでアクセルを緩め、バトルを挑発する中里。限界領域でハチロクを手足のように操る拓海の腕前に、涼介は素直に感嘆する。一方、拓海はハチロクのチューニングに違和感を覚えていた。

CHECK POINT

テクノロジーではなくテクニック。「ハチロクはドライバーを育てるクルマだからな」と文太がいう。拓海は子どものころからドライビングテクニックを磨いてきた。そのため、どんなセッティングでも自分の運転を変える柔軟性を持っている。最初は中里に離されていたが、コーナーごとに拓海は追いついていく。

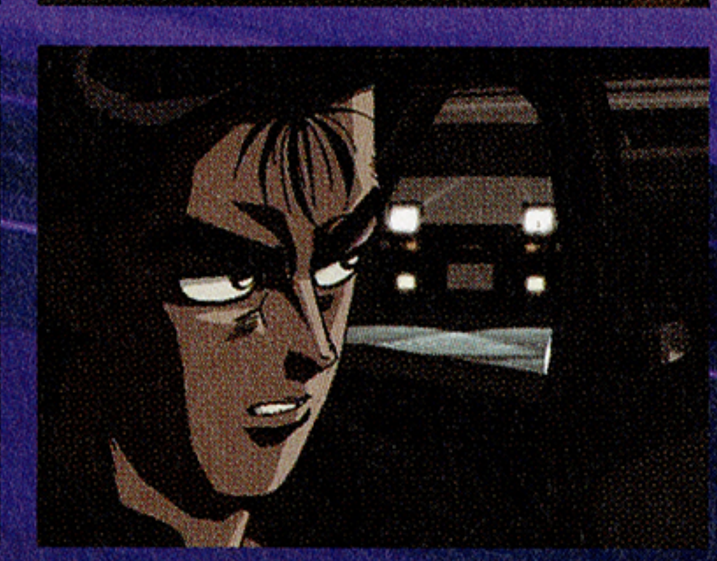
PUNCH LINE 名シーンピックアップ



父・文太が対R32用に施したセッティングは「アクセルオンで、ドアンダー」。つまり、コーナリング中にアクセルを踏むと、アンダーステアが発生し、コーナー外側にふくらんでいく設定になっている。拓海はセッティングの変更を知らなかったが、走っているうちにその違いに気づく。

WORDS

「よくわかんないけど、これはこれでいい感じだぜ。流れ過ぎないから、思い切って踏んでいける！」(拓海)



NEXT EPISODE

予告編

「涼介さん、圧倒的にR32が有利というのが大方の予想でしたが」「R32はノーマルで全長4640ミリ、全幅1720ミリ、車重……」「つまり？」「つまり、R32はノーマルで全長4640ミリ、全幅1720ミリ……」「要するに下りなら拓海君が……」「要するに、R32はノーマルで全長4640ミリ、全幅……」「えーい次回、『頭文字D』、爆裂！5連ヘアピン。Don't miss it!!!」

BGM

音楽

Rage your dream
m.o.v.e

ファンにはおなじみ、普段はエンディング曲として使われるm.o.v.eの楽曲。走りに目覚めた拓海がハチロクを取り戻したシーンにかかる。

RUNNING IN THE 90'S
MAX COVERI

いよいよレース開始。シンセサイザーの高音フレーズと高速リズムがR32とハチロク、FC三つ巴のスピード感を演出する。

BACK ON THE ROCKS
MEGA NRG MAN

トッカーナとフーガをベースにした中里のテーマ。追いかけるハチロクに、追われる中里。不敗神話の「R」の文字が輝く。

BURNING UP FOR YOU
SARA

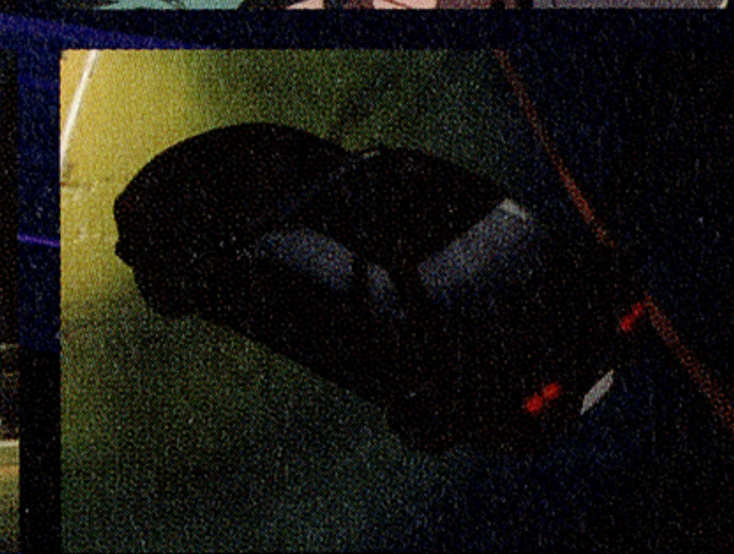
ハチロクのピーキーなセッティングと拓海のドライビングががっちりハマった。拓海が中里を一気に追いあげるときに流れる楽曲。

TITLE

ACT.10 爆裂！5連ヘアピン

Cast 拓　海　三木眞一郎／文　太　石塚運昇／イツキ　岩田光央／なつき　川澄綾子／祐　一　西村知道／啓　介　関　智一
池　谷　矢尾一樹／健　二　高木　渉／中　里　檜山修之／細井　治／鈴木　淳／田中伸幸

Staff 脚本　岸間信明／絵コンテ　湖山禎崇／演出　工藤　進／音響制作　テクノサウンド／作画監督　一川孝久
レイアウト監修　林　千博／色彩設計・色指定　安斎直美／撮影監督　森下成一／編集　岡安プロモーション
エンディングテーマ「Rage your dream」m.o.v.e(avex tune)



STORY

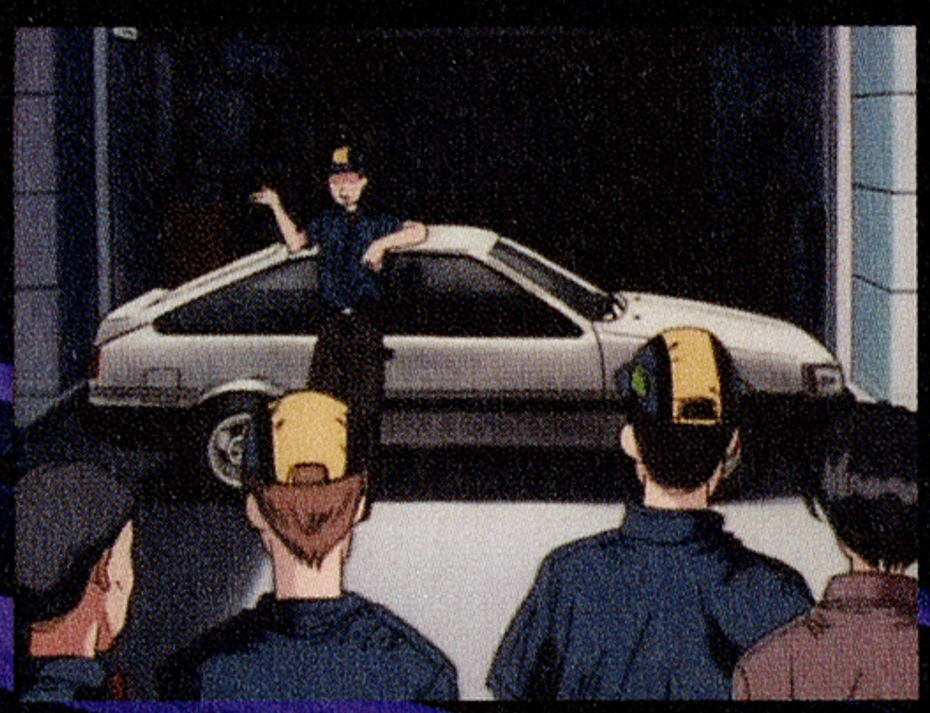
高橋啓介が拓海に抜かれた悪魔の5連続ヘアピンがきた。中里は「溝落とし」をさせないために、インを締めた走りをする。しかし、拓海はラインをクロスして強引に中里を抜いた。焦った中里はガードレールに激突、スピンアウトする。

後日、イツキはハチロクと勘違いして、中古のハチゴーを購入。拓海はハチゴーで秋名に行くことを約束した。

CHECK POINT

拓海と中里のバトルに決着がつく。中里の作戦はひたすらインを締めることで、啓介が敗れた拓海の「溝落とし」を封じることだった。しかし、拓海はアウトから攻めようとする。焦る中里はインを少しだけ開けて、コーナリングスピードを優先した。駆け引きに勝った拓海は僅かなスキマを見逃さずインから抜いたのである。

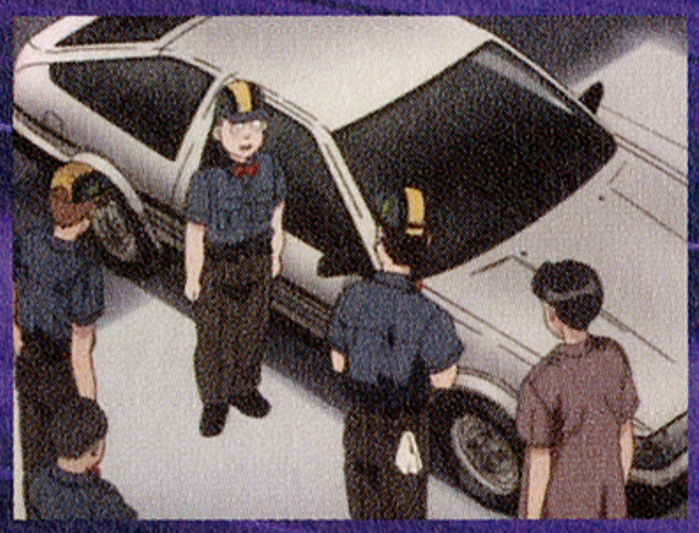
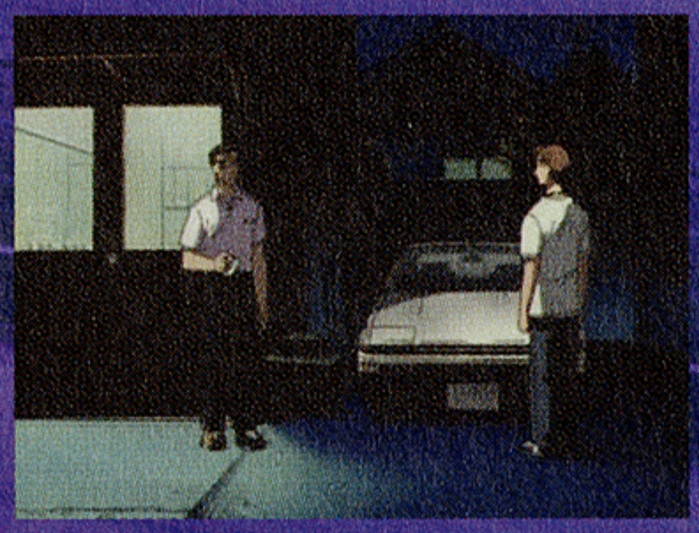
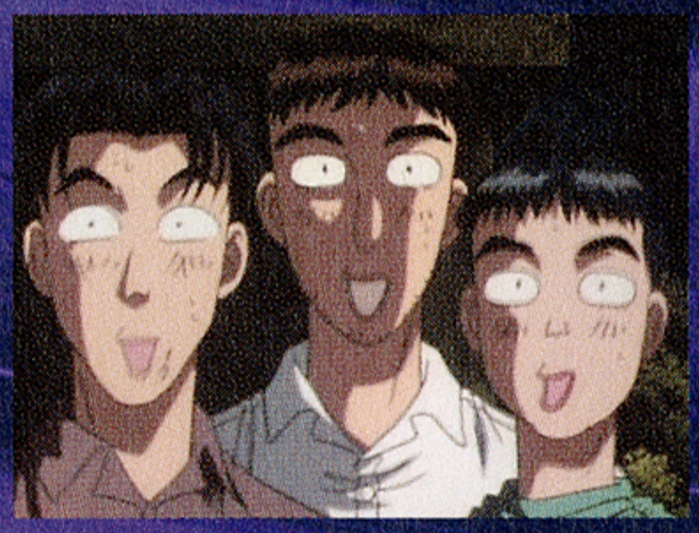
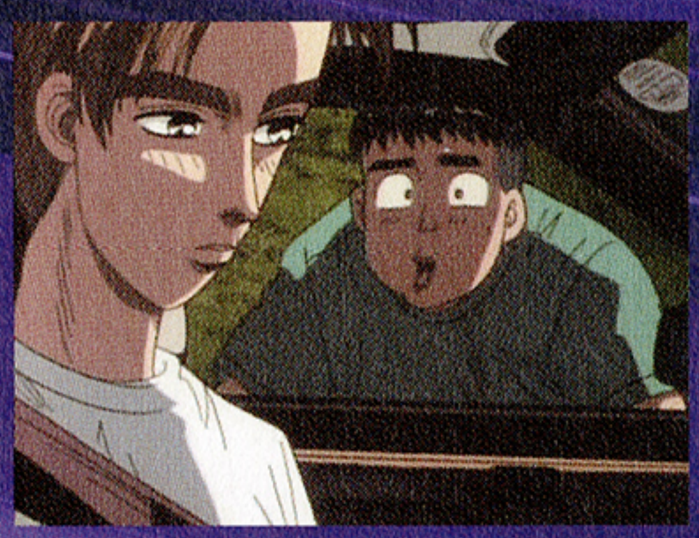
PUNCH LINE 名シーンピックアップ

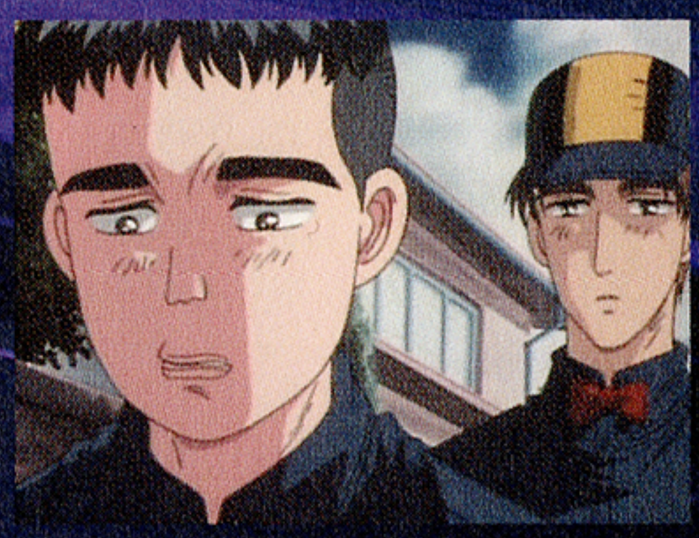


ハチロクとハチゴーは外観はほぼ同じ。エンジンだけが違うため、ボンネットを開けなくては素人目には違いがわからない。ハチロクのエンジンはDOHC、吸気・排気バルブを2本のカムで駆動する。ハチゴーのエンジンはSOHC、吸気・排気バルブを1本のカムで駆動する。DOHCのほうが高回転高出力まで引き出せる。

WORDS

「拓海、なんか変わったな。前はクルマに冷めていたのに」(イツキ)



NEXT EPISODE

予告編

「くくっ……」「泣いているんですか池谷さん」「喜んでいるんだ！　ついに戻ってくるんだよ、オレのS13が」「ああ、第２話で事故った悲劇のスペシャリティカーS13」「くっ……」「あれ、池谷さんどうしたんですか？」「ところでさ、最近拓海のハチロクを狙って、赤のEG6が出るって聞いたんだけど。そいつのこと何か知らないか」「いいえ」「次回、『頭文字D』、デンジャラス慎吾登場！」「おい！」「Don't miss it!!!」

BGM

音楽

HEARTBEAT

NATHALIE

勝負は５連ヘアピン。ハイテンションなリズムが、心臓の鼓動を加速する。拓海がインを突き、中里を抜き去るシーンでかかる。中里はスピンして試合終了。勝負が決まる一曲。

LONELY LOVE

SOPHIE

イツキのハチゴーをバカにした走り屋に勝負を挑む拓海。普段はぼーっとしているが、理不尽なことは許せない。拓海の感情にあわせて、ユーロビートのホットなメロディが流れる。

今だから話せる

『頭文字D』を書くということ

脚本家 ― 戸田博史 × 岸間信明

2013年で放送から16年目を数えるアニメ『頭文字D』。この作品を支えてきた脚本家のお2人が戸田博史さんと岸間信明さん。マンガからアニメへ。メディアを超えて、作品の魅力を抽出する。彼らにとって『頭文字D』とはどんな作品なのか。16年を振り返りつつ、たっぷりと語っていただいた。

青春群像と親子のドラマ

―― アニメ『頭文字D』にお2人が関わることになったきっかけはなんだったんでしょうか？

戸田　最初は『北斗の拳』（★1）の原作者・武論尊さんから声をかけていただいたんです。「お前に向いている作品がある」と。当時、『頭文字D』のアニメ化をするにあたって脚本家を探していて、プロデューサーがいろいろな方に相談していたそうなんですね。それで僕に話が来たわけです。ただ、ひとりでTVシリーズをするのは大変だから……。

岸間　それで僕に声をかけてくださったんです。戸田さんとはアニメ『中華一番！』（★2）でごいっしょしていたので。その縁もありました。

―― 原作マンガをお読みになったときの印象はいかがでしたか？

岸間　リアルとドラマのバランスが良いなと思いました。クルマの描写はリアルだけどマニアックすぎないし、荒唐無稽でもない。拓海やイツキたちの青春群像と、父の文太と息子の拓海との関係性、そのふたつのドラマも良いバランスで入っていたと思います。

戸田　父と子の関係が、一種の教育論のように思えるんだよね。たとえば『巨人の星』（★3）のように父の無念を子が晴らすという関係性の作品もあるんだけど、この作品は違う。父も子も自分の人生を生きていて、そのうえで父は子に走りの英才教育を施している。

岸間　アニメ『頭文字D』のSecond Stageで、拓海がハチロクのエンジンを壊してしまったとき（★4）に、文太が迎えに来る。あのシーンが一番好きなんです。ああいうドラマがすごくよくできているなと。

戸田　僕は年齢的にいうと文太のほうが近いから、教育論のように読めるんです。

バトルの盛り上がりこそ全て！

―― クルマのバトルはいかがでしたか？

戸田　実は僕がクルマの免許を取ったのは、40歳過ぎなんですよ。『頭文字D』をやっていたときは、それほどクルマに詳しくなかったんだけど、それでも入り込めた。それはバトルが盛り上がるからなんですよ。僕はカーレースものの作品をやったのは『頭文字D』一作だけで、ひたすらバトルものの作品を多く手掛けてきました。それもあって、僕は『頭文字D』をバトル

戸田博史

●とだひろし／脚本家。『まんがはじめて物語』『魔法のプリンセスミンキーモモ』『ドラゴンボールZ』『らんま1／2』などを手がける。現在は脚本家を引退し、新たなる人生を歩んでいる。

岸間信明

●きしまのぶあき／脚本家。1983年『パーマン』で脚本家デビュー。『ドラえもん』『SLAM DUNK』『しまじろうのわお！』などを手掛ける。『頭文字D』では最新作Fifth Stageでも筆を振るっている。

作品だと捉えていて、バトルの盛り上がりこそが全てだと思っていました。

岸間　バトルの決着がきっちりつく作品ですからね。やっぱりマンガとアニメではバトルの描き方が違うんです。たとえばマンガのレース中では涼介が延々としゃべっているシーンがあるんですが、それをそのまま映像にすると単調になってしまう。そこで涼介のセリフを走りのシーンとかぶせたり、拓海がヒール・アンド・トゥをするところだったら足元にカットを切り替えたり。細かいところまで『頭文字D』でかなり勉強させていただきました。いまでは「レースもののアニメなら任せてくれ」といえるほどです。

戸田　脚本を何本も書いているうちに、秋名山やいろは坂は実際に行ったような気分になっていました。モデルになっている道路が、TV番組で出てきたときに、「ここに看板があるぞ」「この橋を渡るとゴールだな」とか、そういうところが気になってしまうんです。

岸間　そうそう。モデルとなったコースをクルマで実際に走ると、思わず拓海のような気持ちになっちゃう。もちろん安全運転をするんですけど（笑）。

『頭文字D』はアニメマニア向けではない！

脚本の会議はいかがでしたか？

会議に参加するのは、僕ら2人とプロデューサーぐらい。

岸間　会議に参加するのは、僕ら2人とプロデューサーぐらい。一番少ないときは3人。最近のアニメのホン読み（脚本会議）に比べたらすごく小規模でした。最初にプロデューサーから「この作品はアニメマニアに向けて作る作品ではない」とおっしゃっていて。それはすごく共感しました。中にはアニメのマニアに向けて作る作品もありますが、そうするとすごく小さな幅の作

★1
『北斗の拳』
1984年から放送された作品。『世紀末救世主伝説 北斗の拳』。戸田博史はメインの脚本家として、ほかの参加脚本家に比べてもっとも多い話数を担当している。荒土と化した地上で生き残りをかける拳法家たちの戦いを描いたバトルストーリー。

★2
『中華一番！』
1997年から約1年にわたって放送された作品。脚本を戸田博史、岸間信明、菅良幸の3人で担当している。少年料理人・劉昴星が特級厨師になるために様々な料理人と出会っていくストーリー。

品になってしまうんです。

戸田　僕自身もアニメマニアではないしね。最初にバトルシーンをCGで作って、ユーロビートをかけるんだといった時点でアニメファンではない多くの人たちに向けて作るんだというイメージができていました。

――原作のマンガからアニメに向けて解釈しなくてはいけない部分もあったかと思いますが、どのようにお考えでしたか？

戸田　この『頭文字D』みたいにキャラクターとドラマがはっきりしているとアニメの脚本を作るのは基本的には楽なんですよ。あとは時間の流れをどうするか。アニメのシナリオの仕事は、時間の編集なんです。

岸間　そうですね。マンガや小説と、映像が一番違うところは時間が流れること。映像は一度上映が始まったら、時間の流れはエンディングまで止まらないわけで。その流れの中でいかにヤマを作っていくか、ということに尽きると思うんです。

戸田　まず長く続いている原作を30分ごとに一区切りに分けていく。そのうえで30分間の中で山場を作っていかなくちゃいけない。その山場さえ作れれば、『頭文字D』はキャラクターもディティールもはっきりしているのでやりやすかったです。

身近なキャラクターたち

――筆が乗るキャラクターはいましたか？

岸間　キャラクターとしては池谷が一番好きです。一番身近な存在ですし、池谷が失恋するエピソードは良かったですね。

戸田　ナイトキッズの中里毅と庄司慎吾は好きですね。いつも口論しているけど、実はいつもいっしょにいて。仲が良いんじゃないかと。

岸間　今度の『頭文字D』Fifth Stageでは、中里と庄司のシーンを入れたんです。あと、イツキの「くーっ」って表情も。シリーズのファンへ向けています。

――後半の脚本執筆作業中に、前半のオンエアがスタートするわけですよね。映像を見ると、脚本は変化するものですか？

岸間　それは変わりますよ。やっぱり声優さんの声を聴けるのが大きいですね。現場のスタッフもキャストもプロフェッショナルな方なので、脚本作業が終わったら、基本的に現場のみなさんにお任せしているんですが、やっぱり出来上がった映像を見ると刺激的です。

戸田　僕もそうですね。脚本が終わったら、あとはスタッフにお任せしています。だから、あとはオンエアを楽しみにしていました。

――98年にオンエアされたときは、すごく評判が良かったと聞いていますが反響はありましたか？

岸間　ユーロビートでバトルするんだというアイデアを聞いた時点で、これは行けるんじゃないかと思っていたんです。オンエア後はなんとなく、反響が聞こえてくる感じでしたけどね。

戸田　放送終了後に何年もたってから「『頭文字D』を見ました」と若い子から言われました。長く愛されている作品になったなと思いましたね。

思い出の『頭文字D』

――お2人が『頭文字D』に関わっていて、印象に残っていることはなんでしょうか？

戸田　実は僕はいま小田原にいまして脚本家を実質引退しているんです。シリーズとして関わった作品は、この『頭文字D』が最後になります。最後に関わった作品が劇場版『頭文字D』Third Stage（★5）で、それを引っ越したばかりの小田原の映

★3
『巨人の星』
1966年から連載していた、原作・梶原一騎、作画・川崎のぼるによるマンガ。かつて巨人軍の三塁手だった父・一徹の意志を継ぎ、巨人軍の投手を目指す、星飛雄馬の物語。

★4
ハチロクのエンジンを壊してしまったとき
『頭文字D Second Stage』第6話で拓海はエンペラーの須藤京一と赤城でバトル。限界までアクセルを踏んだところ、エンジンがブローしてしまう。父の文太は車載専用車で拓海を迎えに来る。

画館で観たんです。

岸間　あれ、1月の映画でしたよね。

戸田　そう、正月映画でした。僕は東映映画が好きで、正月映画になったのはすごくうれしかったし、映画の冒頭に流れる東映の三角マークにあこがれていたので……。

岸間　ああ、波がざばーんとなっているところに、クレジットがでてくるやつですね。

戸田　そうです。その作品にクレジットされたのがすごく光栄でした。あの劇場版『頭文字D』Third Stageって前半は僕が書いて、後半は岸間さんが書いているんですよ。作品の中身も同じで、前半にバトルがあって、後半は拓海の卒業をめぐるドラマがある。意識はしていなかったですけど、2人の脚本家の持ち味が自然と出ているなと思うんです。

岸間　当然、原作をベースにしているから、ストーリーに違いはないんですけどね。

戸田　原作のたくさんあるエピソードの中から1時間40分前後の中に納めないといけないから、当然カットしなくちゃいけない部分が多いはずなのに、自然と脚本家の色が出ていた。脚本家を引退するつもりで映画を見ていたんですけど、そのとき初めて「脚本とはこういうものなんだ」とわかったような気がしたんです。

岸間　脚本って不思議なもので、間違ってデータを消してしまってイチから書き直すと、以前のものとは全然違う脚本ができあがることがあるんです。そのときによって書くものが変わるんですよね。にもかかわらず、脚本家の個性みたいなものがどこかにあるんです。

――いまも『頭文字D』に関わっている岸間さんにとって印象に残っていることはなんですか？

岸間　それこそ16年やってきたわけで……僕の脚本家のキャリアが今年で30年目ですから、だいたい半分になりました。

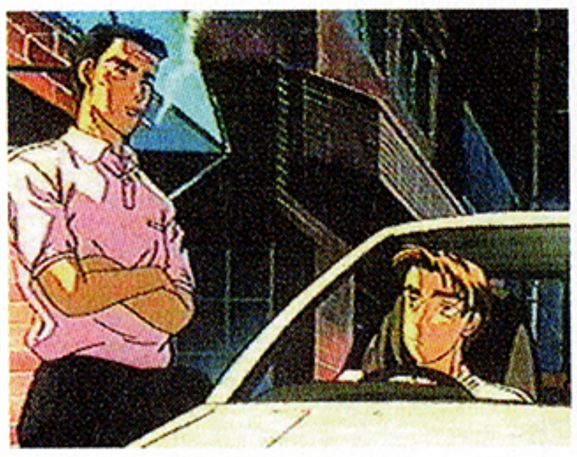
――お2人が、いま『頭文字D』First Stageをご覧になるとどんな感想をお持ちですか？

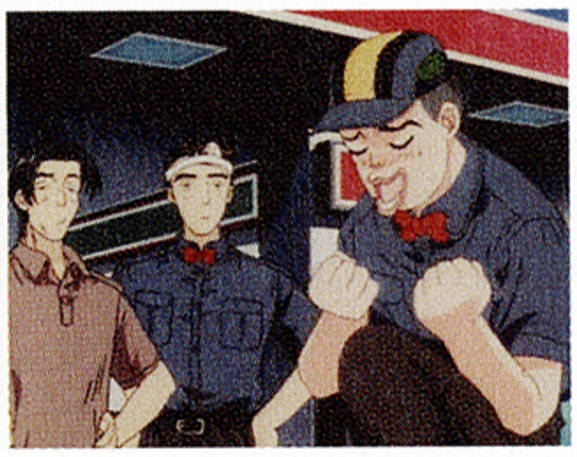
岸間　先日観ましたよ。これだけ時間が経つと客観的に楽しめる部分があるんですが、青春群像としてよくできているなと感心してしまいました。でも、こちらは16年経っているんですけど、劇中で拓海たちは1年ちょっとしか経っていないんですよ。

戸田　僕は最近アニメをほとんど見ていないんですよ。人生のステージが別のステージになってしまいましたので。でも、自分にとっては唯一のカーレース作品ですし、それがいまだに続いていることがうれしいです。

「僕は『頭文字D』をバトル作品だと捉えていた。バトルの盛り上がりこそが全てだと思っていました」

（戸田博史）





「青春群像劇と拓海、文太親子の関係がすごく良いバランスの作品です」

（岸間信明）

★5
『頭文字D』Third Stage
2001年に公開された『Third Stage -INITIAL D THE MOVIE-』のこと。脚本は戸田博史、岸間信明の連名。

新たなステージは神奈川!

関東最速への挑戦!

頭文字[イニシャル]D Fifth Stage

DVD VIDEO

INITIAL D FIFTH STAGE Vol.1

頭文字[イニシャル]D Fifth Stage Vol.1

¥6,090(税込)

2013年1月11日発売!

以降、毎月1巻ずつ発売! Vol.2 2月8日発売 Vol.3 3月8日発売

各巻に実写特典映像を収録!
Vol.1は頭文字[イニシャル]D -Spirit- Vol.1
~第13回 AE86フェスティバル
in 岡山国際サーキット Part1~

●スタッフ
原作:しげの秀一(講談社「週刊ヤングマガジン」連載)
音響監督:三間雅文
監修:土屋圭市、ホットバージョン
アニメーション制作:シナジーSP
監督:橋本みつお

●キャスト
藤原拓海:三木眞一郎
高橋涼介:子安武人
高橋啓介:関智一
史浩:細井浩
池谷浩一郎:矢尾一樹
武内樹:岩田光央
健二:高木渉
上原美佳:早見沙織
藤原文太:石塚運昇

発売元:ウェッジリンク 販売元:エイベックス・マーケティング
©しげの秀一/講談社・ウェッジリンク

2013年発売

オープニングテーマ『Raise Up』を収録した
m.o.v.e
ベストアルバム2013年発売!

2013 1.16 発売

エンディングテーマ
CLUTCHO『Flyleaf』
【CD+DVD[初回生産限定盤]】¥1,680(税込)
【CD】¥1,050(税込)

『頭文字[イニシャル]D』

バトルには欠かせない音楽たちも続々登場!

2013 2.8 発売

SUPER EUROBEAT presents 頭文字[イニシャル]D Fifth Stage

D SELECTION

¥3,059(税込) AVCA-62121

2013 3.8 発売

頭文字[イニシャル]D Fifth Stage

SOUND FILE

¥3,150(税込) AVCA-62175

2013 3.8 発売

SUPER EUROBEAT presents 頭文字[イニシャル]D Fifth Stage

NON-STOP D SELECTION

¥3,150(税込) AVCA-62176

発売元:エイベックス・マーケティング　販売元:エイベックス・マーケティング

お求め安い価格で

これまでの『頭文字[イニシャル]D』を振り返ろう!
SUPER EUROBEATのCDも付いてくる!

頭文字[イニシャル]D

フルスロットル・コレクション

好評発売中

First Stage Vol.1
¥11,000(税込)

First Stage Vol.2
¥11,000(税込)

2013 2.15 発売

Second Stage
¥11,000(税込)

Third Stage & Extra Stage
¥8,600(税込)

2013 4.19 発売

Fourth Stage Vol.1
¥8,600(税込)

Fourth Stage Vol.2
¥11,000(税込)

順次発売!

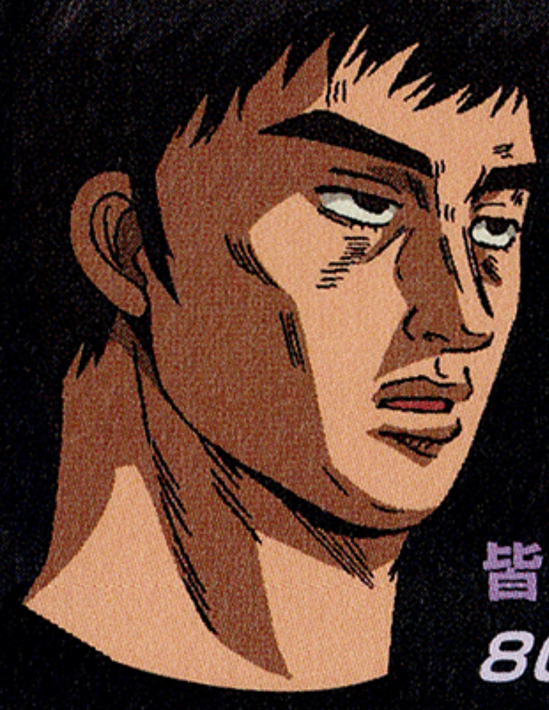
発売元:エイベックス・マーケティング　販売元:エイベックス・マーケティング
©しげの秀一/講談社・エイベックス・エンタテインメント・オービー企画
©しげの秀一/講談社・ウェッジリンク・オービー企画

ヒルクライムを制す!!!

PPVにて放送　毎月第2週金曜日に更新予定！　5・6話は1月11日放送！

史浩:細井 治　池谷浩一郎:矢尾一樹　武内 樹:岩田光央　健二:高木 渉　小柏 健:有本欽隆

企画:庄司隆三　脚本:岸間信明　キャラクターデザイン:佐藤正樹　総作画監督:小丸敏之
美術監督:坂本信人　撮影監督:池上伸治　編集:小深田真次　音楽:梅堀 淳　音響監督:三間雅文
プロデューサー:福田佳与　監督:橋本みつお　製作:ウェッジリンク



皆川英雄
80スープラ

神奈川エリア第2ステージ
最高潮!!

特報 第3弾

焦りが勝負を分ける!!

タイヤマネージメントを制す者は、

頭文字D Fifth Stage アニマックスpresents

Cast 藤原拓海:三木眞一郎 高橋涼介:子安武人 高橋啓介:関 智一
皆川英雄:小西克幸 藤原文太:石塚運昇

Staff 原作:しげの秀一(講談社「週刊ヤングマガジン」連載)
メカデザイン・メカ作監:横井秀章 CG監督:安田兼盛
監修:土屋圭市 アニメーション制作:Synergy SP

高橋啓介
FD3S

プロジェクトDを阻止するための神奈川第2防衛ラインはチームカタギリストリートバージョン! ダウンヒルの藤原拓海VS小柏カイのバトルは、涼介の言う「藤原ゾーン」へと突入した拓海の勝利で終わった。

さあ、いよいよヒルクライム!

高橋啓介VS皆川英雄のバトルがはじまる。チームカタギリはサーキットで鍛えぬかれたプロフェッショナルであり、皆川はそのなかでも抜群の腕前を持つ。

皆川は言う。

「みょうにイライラするというか、残酷な気分になっていくのはなぜかな…完膚なきまでにたたきのめしてやりたい気分だ」

皆川の冷静沈着な態度は、冷酷さへとつながっていた。

啓介と皆川。どちらもモータースポーツの技術を峠に応用する正統派のドライバーである。それならば、より正統派のプロとして鍛え上げてきた皆川に、啓介は勝てるのか!?

啓介の真価が問われている!!

最新話紹介

第5話『藤原ゾーン』

小柏のMR-Sがスピンする。拓海VS小柏のバトルが決着した！

握手を求める小柏。彼の心を占めるのは拓海へのリスペクトだ。

プライド 第6話『啓介の意地』

いよいよ啓介VS皆川のバトルが始まる！ プロとアマの対決はいかに!?

Hideo Minagawa

Kai Kobashiwa

小柏カイ

レーシングチーム カタギリのダウンヒルを担当するプロドライバーである。プロレーサーとして腕を磨き、拓海に挑戦した。だが、拓海に負け、公道レースの奥深さを認める。

皆川英雄

レーシングチームカタギリのヒルクライムを担当するプロドライバー。時折、口にする言葉には冷酷さが漂う。啓介に挑む。

FD vs スープラ!!

峠のバトルはサーキットのようにはいかない。そこにマシンの差は決定打ではない。決めるのはドライバーの技量だけ！

もちろん、そんなことは皆川はよく知っている。知っているからこそ、あえて、啓介の後方にポジションを置いたのだ。

スピード勝負に突入するFD vs スープラ!! 勝負を制するキーワードは「タイヤマネージメント」だ!!

その果てに、プロとアマの下克上はあるのか!?

CHECK

FDのテールを小突くスープラ！ 何を意味するのか!?

講談社キャラクターズA

メモリアル DVDマガジン
頭文字D First Stage Dash編 VOL.3

2013年1月4日　第1刷発行

講談社編

発行者：清水保雅
発行所：株式会社　講談社
〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21
［電話］編集部：03-5395-3570
販売部：03-5395-3608
業務部：03-5395-3603
印刷所：大日本印刷株式会社
製本所：大日本印刷株式会社

●価格は外箱に表示してあります。落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記の上、小社業務部までお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは編集部までお願いいたします。
●本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製、転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも
著作権法違反です。

©KODANSHA 2013

N.D.C.726　36p　19cm　Printed in Japan　ISBN 978-4-06-358429-5

MAGAZINE STAFF

編集　西　保雄（講談社）
柿崎俊道
執筆　志田英邦
野口智弘
柿崎俊道
デザイン　大森寛士（masterpiece inc.）
写真　花房徹治（講談社）
神谷美寛（講談社）
取材協力　福田佳与

DVD STAFF

ディレクション　似鳥将俊（Video-Tech）／渡辺有希（Video-Tech）
柿崎俊道
コーディネート　似鳥将俊（Video-Tech）／渡辺有希（Video-Tech）
エンコード　林　慎一（Video-Tech）
オーサリング　堀岡祐子（Video-Tech）
編集　尾形茂信（Video-Tech）／渡邊吉郎（Video-Tech）
メニューデザイン　渡邊吉郎（Video-Tech）／大森寛士（masterpiece inc.）
MA　高木公平
撮影　梶田　悟
VE・音声　星　照光（REC）
取材協力　福田佳与

CONTENTS

超スペシャルインタビュー！ しげの秀一　ナビゲーター 三木眞一郎

『頭文字D』を彩る女たち　茂木なつき役 川澄綾子・佐藤真子役 根谷美智子・沙雪役 かかずゆみ

頭文字D CAR COLLECTION R32スカイラインGT-R

アニメ『頭文字D First Stage』が生まれた1998年5月−6月

『頭文字D』ストーリー解説(ACT.8〜ACT.10)

今だから話せる『頭文字D』を書くということ　脚本家 戸田博史・岸間信明

最新情報 『頭文字D Fifth Stage』FD3S vs スープラ